The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明治前期日本文典の研究
Author(s)	山東, 功
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42008
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【8】

氏　　名	山東　功（さんとう　いさお）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　15101　号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本学専攻
学位論文名	**明治前期日本文典の研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　工藤真由美 （副査） 教　授　真田　信治　　助教授　石井　正彦 審査協力者　日本女子大学教授　清水　康行

論文内容の要旨

本論文は、明治前期に多く著され、国語教育の場においては教科書として使用されていた日本語文法書群である日本文典について、研究史的検討を総合的に試みたものである。「序　日本語学史研究方法論序説」、「第一部　明治前期日本文典の諸相」、「第二部　物集高見の日本語学史的研究」から構成され、400字詰原稿用紙にして627枚からなる。

「序　日本語学史研究方法論序説」は、明治前期日本文典の研究史的検討の前提を考察すべく、研究史自身の検討と研究方法論の確定を行なっている。従来、日本文典の多くは研究史上看過され、あるいは酷評され続けてきた。しかし、こうした明治前期の日本文典に対する評価を決定した研究史自身の問題、すなわち日本語研究の歴史を記述した「国語学史」という研究の成立と展開過程を批判的に検討することによって、明治前期日本文典の研究史的検討に際しては、日本語研究内容に密着しつつ、当時の思想潮流といった思想・文化史的背景を勘案した、総合的な研究史記述が要求されるとする。本論では、従前の国語学史に替わるべきこの研究史記述を「日本語学史」として提唱している。

「第一部　明治前期日本文典の諸相」では、まず、明治5年以降明治20年代までを明治前期として確定し、従前にはあまり指摘されていなかった、国語教育と文法書との関係について、当時の教育施策と関係づけながら検討を加え、明治前期日本文典が国語教科書としての側面を強く持っていた点を論述している。次に、詳細な文法書目一覧を作成し、それらを主として洋文典に拠った洋式日本文典系統と、国学的言語研究を範にした国学風文典との二系統に分類し、それぞれ系統ごとに整理を行なっている。さらに、洋式日本文典を代表するものとして、明治9年に刊行された中根淑『日本文典』を取り上げ、全体の構成や品詞分類を開成所版『英吉利文典』に拠ったという内容を検討し、洋式日本文典の位置とその意味を考察している。また、国学風日本文典の中からは明治12年刊行の佐藤誠実『語学指南』を取り上げ、文典としてのありかたや俗言の活用に対する言及が、国語教育との関係から行なわれたものであることを示し、国学風日本文典の位置とその意味についても考察している。

「第二部　物集高見の日本語学史的研究」では、明治前期の文法研究を体現する研究者として物集高見を取り上げる。まず、物集が初めて行なった文法研究として、明治11年刊行された国学風文典的体裁の『初学日本文典』を取り上げ、特にその内容の面では、父物集高世の『辞格考抄本』の影響や、部分的には蘭文典である大庭雪斎『和蘭文語凡例』の知見が取り入れられていることを指摘する。第2に、物集の研究が国語教育と不可分であったことを示すものとして、『初学日本文典』の参考書である『日本文法問答』が同年に刊行されていることを指摘し、物集の関与が

強い物集格太著『小学詞遺』の存在についても研究史上初めて触れている。こうした文法研究は言文一致の実践理論にもなることから、言文一致論を物集が後年撤回した原因は、国語教育的発想からきた、文語と口語との直線的な対応認識に由来するものであると述べる。第３に、明治16年脱稿の洋式日本文典『日本小文典』の検討を行い、物集の文法研究の洋風化は、辞書編纂と不可分であり、言文一致の趨勢にも合致したものであったことを指摘している。第４に、実践女子大学図書館蔵『普通日本文典』について研究史上初めて言及し、本書が明治20年頃に成立したもので、物集の言文一致論を支える口語文法研究の成果であると推定している。第５に、従来成立年代が不明であった、物集が著した稿本の文法書『日本文語』についてその成立経緯と内容を検討し、執筆年代については、明治23年もしくは24年と推定でき、内容の面では、折衷文典として定置できると指摘している。最後に、物集の文法研究が明治20年代を頂点とする欧化政策や高等教育の充実と密接なつながりをもっていたと結論づける。

論文審査の結果の要旨

本論文は、これまで軽視ないし無視されてきた明治前期日本文典の丹念な調査・分析を通して、従来の「国語学史」を批判的に乗り越えた「日本語学史」を構築しようとする意欲的な論考である。

多くの明治前期文典を精査し、それらの系統と影響関係の概観を示し、その上で、洋式文典の代表として中根淑『日本文典』、国学風文典として佐藤誠実『語学指南』、それぞれの内容と影響関係を具体的に論じた「第一部」は、多くの新見を含むものである。特に国学風文典と国語教育との関係の指摘は、傾聴に値しよう。

物集高見の文法研究に焦点をあてた「第二部」は本論文の白眉であり、新資料発掘を含めた資料精査、国語教育ならびに近代的辞書編纂との関係のなかで折衷文法に収斂してゆくまでの振幅あるプロセスの記述と評価、物集の言文一致論と文法論との関係の指摘、言文一致論撤回の原因の指摘等、今後の研究者が学ぶべき諸点を示している。

あえて注文をつければ、本論文で提唱される「日本語学史」の、日本語なるものの内実や言語学との交渉についてのより徹底した議論の提示がほしいところである。序論における研究方法論の確定と本論での具体的記述とがややちぐはぐな感じは否めない。しかし同時に、近年の外在的国語学批判の持つ陥穽についての指摘等は十分首肯できるものであり、今後の展開が大いに期待されるところである。

総じて、本論文において示された「日本語学史」への視座、未開拓に近かった明治前期の文法研究に対する総合的分析は、従来の水準を越える内容を多く含んだものである。

よって、本論文は、博士（文学）の学位に十分ふさわしい価値を有するものと認定する。